A. KAWABATA, K. TAKAGI and A. KATSUBE: A Study
on Mental Health of High School Boys and girls
from the viewpoint of Suicide (2)

自殺を中心とした高校生の精神衛生に 関する研究(2)

京都大学 川 畑 愛 義
高 木 公 三 郎
名古屋大学 勝 部 篤 美

緒 言

第1報においては、高校生の自殺企図に対して性格・環境・生活歴等の要因がいかに関連しているかを調べるために、京都府、兵庫県、滋賀県の3府県にまたがって地域別・修学課程別に選んだ6校の高校2年生男女合計999名を対象として行つた検査ならびに調査の一部について報告した。そこでは、今までに自殺を企図したことのあるもの(A群, 男子118名, 女子76名)と、今までに自殺を企図したことのないもの(B群, 男子561名, 女子186名)との比較考察を行つた結果、性格特性については可なり明瞭な差異を見出すことができたが、環境的要因の中の家族構成単独では明らかな差異は見出し難いことが指摘された。今回は第1報で未報告となつてゐる諸問題についての調査結果を報告するものである。調査の対象・期日・方法等は第1報と全く同様で一連のものである。

結果ならびに考察

1. 成育環境について

先ず、成育者について考えると、幼少時におけるパーソナリティ形成を重視する立場からは育て方が問題である。そのためには、誰が育てたか、どのように育てたかを調べなければならないが、通常、被調査者本人は誰が育てたかは知つていても、どのように育てた

かという方法については判然としないことが多い。そこで本研究では前回の大学生の場合と同様に成育者のみについて調べて見た。その結果は特別に指摘するに足るまとまつた傾向は見出せなかつた。これは大学生の場合にも殆ど差の認められなかつたものである。

次に、成育地の環境について考察する。生活歴にともなつて自己の住居の附近の環境はどのようであつたかについて調べた結果は、第1表の通りである。これによつて注目されることは、裏長屋という環境で育つたものは男女ともに何れの時期においてもA群>B群の関係が認められたことである。この傾向は

第1表 成育地の環境(高校期)(%)

	男 子		女 子	
	A	B	A	B
1. 住宅地	31.6	29.7	34.3	40.4
2. 商店街	15.4	17.1	23.6	20.4
3. 歓楽街	1.6	1.8	2.6	0
4. 工場地	1.6	4.5	2.6	0.5
5. 裏長屋	18.7	11.0	25.0	10.8
6. 鉱山地	0	0	0	0
7. 農 村	20.2	22.2	11.9	25.2
8. 漁 村	5.9	6.8	0	0
9. 山 村	2.4	2.1	0	1.1
10. その他	2.4	1.0	0	0
無記入	0	3.8	0	1.6

大学生の場合にも見られたものである。また、農村においては、男子では A・B 両群間に殆ど差がないにもかかわらず、女子では A 群 < B 群の関係が認められるのも注目された。

次に、家の主な職業について調べた結果、特別に注目されたことは次の通りである。即ち、男子の場合、農業において A 群は B 群よりやや少く、漁業において A 群は B 群より非常に少く程度、無職においては A 群は B 群より可なり多くて 2~3 倍となつている。

また、女子の場合では、会社員と農業とがそれぞれ A 群に少く B 群の 1/2 程度、逆に小売商は A 群に多くて B 群の 2~3 倍となつている。これら以外のいろいろの職業については A・B 両群間に殆ど差は見られない。

次に、生活歴にともなつて住居や環境がどのように変動しているか、そしてまた家の主な職業がどのように変動しているかについて調べた結果では、A・B 両群間に殆ど差異が見られなかつた。これらのことも、やはり大学生調査の場合と共通している。

2. 家庭状況および対人関係

父親・母親・同胞・教師等と本人とはどのように結びついているか、また、本人の父と母との融和の状況、本人の交友関係、本人の信仰等はどのようなものであるかということを生後の各時期別に調査した。その結果は次の通りである。まず、父親との結びつきについて注目されることは、「父親と接するのが嫌いである」とか「父親は自分を放置している」とかいう望ましくない状況にあるものは、いずれの時期においても A 群は B 群の 2~3 倍の比率を示していることである。この事実から父親との結びつきの不良な状況が自殺企図に関係をもつであろうことは当然考えられるのであるが、それにしても A 群でこのような状況にあるものは 22~26% であつて、A 群全体の中での比率はそう大きいものではない。

次に、母親との結びつきについては、これも父親との結びつきの場合と同様に、「母親と接するのが嫌いである」とか「母親は自分を放置している」とかいうような望ましくない状況にあるものは、いずれの時期においても A 群は B 群の 2~3 倍の比率を占めている。

しかし、男女ともに母親との結びつきは父親との結びつきよりも遙かに良く、不良なる状況のものの最も多い男子 A 群高校期においてすら 13% に過ぎない。ともあれ、こうした父親や母親との結びつきの不良なものが A 群に多いということは非行少年の問題と関連して考へべきことを示している。

次に、同胞との結びつきについてであるが、これも良くない状況のものは常に A 群 > B 群の関係を示している。しかし、その差は僅少である。

次に、主な先生との結びつきについてであるが、ここで云う主な先生とは主として担任教師を指す。ただし、担任以外であつても、より緊密なつながりをもつ教師のある場合には、その教師のことを意味する。その結果、男子では「先生と接するのが嫌いである」とか「先生は自分を放置している」とかいうような教師との結びつきが不良な状態にあるものは、いずれの時期においても A 群 > B 群の関係が見られ、B 群の 17% 程度に対して A 群は 30% 程度もある。一方、女子の場合には、A・B 両群間に殆ど差は現われていない。

次に、家庭における父と母との融和の状況を調べた結果、男子では「両親の間に喧嘩の絶え間がない」とか「両親の間は何となくしつくりしない」とかいう望ましくない状況のものは、生後いずれの時期においても A 群 > B 群の関係が認められ、2~3 倍の比率となつている。この傾向は女子においても認められなくはないが、非常に消極的である。

次に、交友関係を調べた結果、男子では「悪い友達が多い」とか「限られた人としか交際

しない」とか云う望ましくない状況のものは、生後中学期に至るまで A・B 両群間に差が認められないが、高校期に入つて A 群 31%、B 群 17% と差が開く。また、女子では、生後中学期に入るまでは男子の場合と同様に A・B 両群間に殆ど差は見られないが、中学期において A 群 25%、B 群 9%、高校期において A 群 31%、B 群 12% とかなり大きな差を生ずる。

また、信仰に対する態度について調べた結果では、男女とも A・B 両群間に殆ど差は認められなかつた。ただ注目されたことは「信仰をあなたどる」という最も強い反感を示したものは、男女ともいずれの時期においても A 群>B 群の関係があり、しかも A 群は B 群の 2~4 倍の比率に及んでいることである。しかし、百分比で言えば最高の男子 A 群高校期においてすら 12% にすぎない。これと関連して、現在信仰している宗教の有無を調べた結果では、有とするもの男子の A 群 14%、B 群 16%、女子の A 群 27%、B 群 22% となつていて、ともに A・B 両群間に殆ど差は認められなかつた。

以上の如く、家庭状況および対人関係としてとり上げたいいろいろの項目の中では、望ましくない状況下にあるものは殆ど A 群>B 群の関係が認められた。たとえ、それぞれ単独の項目内では百分比として小さい数値であつたとしても、7 項目の殆どにわたつて常に A>B の関係が成立するということは、やはり全体として大きな意味のあることだと考えざるを得ない。それを裏付けるかの如く、A 群の自殺企図原因を分類して見ると家庭内の問題と対人関係に原因のあるものが圧倒的に多かつたのである。こうしたことは非行少年の問題や青年期におけるノイローゼの問題と密接な関連をもっている。

3. 経済的生活程度

経済的生活程度について調べた結果は、第

第2表 経済状況(貧困者)(%)

	男 子		女 子	
	A	B	A	B
小学まで	22.0	8.0	10.5	3.8
小学期	19.5	6.6	5.3	4.9
中学期	11.1	3.0	3.9	2.7
高校期	7.6	2.1	3.9	2.2

2 表の通りである。この表をもとにした両群間の比較において先ず注目されることは、1. 貧しいという最も下層のものが男女共通していずれの時期においても A 群は B 群より遙かに多いということである。しかし、これら最下層のものの人数は少数でもあり、かつまた中層・上層のものにおいては両群間の差異は余り明瞭ではない。この点、予想していたほどの窮迫さは感じとれない。また、A 群を対象として、自殺を企図した当時の経済的生活程度は従来の傾向から見て上昇期にあつたか下降期にあつたかという点について調べて見ると、男子においては上昇期 14%・下降期 17%・変動なし 61% となつており、女子においては上昇期 25%・下降期 11%・変動なし 54% となつていて、これらの事実からも自殺の要因としての経済的生活程度は根拠が薄らいだ感がある。しかし、われわれが既に行つて来た自殺未遂者の面接事例研究においても、また大学生を対象としたこの種の調査においても、経済的窮迫は大きな誘因となつていたので、ここでの事実は高校生の特殊性と見るべきであろう。

4. 人生に対する態度

A 群と B 群とでは、人生に対する態度が自ら異つていであろうことが予想される。そこで人生に対する感じ方を調べて見た。その結果は第3表の通りである。この表を見るに当つては次のことに注意していただきたい。即ち、A 群の殆どのものは現在既に自殺企図は解消しており、未解消のものはごく少数であるということである。従つて、A 群の中に

第3表 人生に対する態度(%)

	男 子		女 子	
	A	B	A	B
1. 人生は厭なものだと思う	21.3	5.0	22.4	7.0
2. 人生は何となくつまらない	30.7	21.7	31.6	30.7
3. 人生についてどうも思わない	8.5	22.5	1.3	19.3
4. 未だわからないがきつと良いものだろう	20.3	30.8	18.4	25.8
5. 人生は素晴らしいと思う	6.7	11.4	10.5	5.9
6. その他	6.7	5.0	7.9	10.2
無記入	5.8	3.6	7.9	1.1

第4表 自分に対する国や社会の態度(%)

	男 子		女 子	
	A	B	A	B
1. 私の存在を無用だと考えている	17.8	8.2	15.8	5.9
2. 私の存在に関心をもっていない	32.4	32.8	46.1	41.8
3. 私の存在に一応の関心をもっている	18.6	34.8	21.0	35.4
4. 私の存在に好意的である	5.0	2.0	2.6	2.2
5. 私の存在に強い期待をもっている	5.0	6.2	5.3	4.4
6. その他	12.7	11.4	2.6	5.4
無記入	8.5	4.6	6.6	4.9

「人生は素晴らしいと思う」と答えているものが何人かいても、それは決して矛盾してはいない。むしろ、何らかの方法によつて自殺企図は解消し、現在では希望をもつて生きている姿として解すべきである。それにしても、「人生はいやなものだと思う」という最も望ましくない状態にあるものが未だに A 群男子 21%・A 群女子 22% となつていて、B 群男子 5%・B 群女子 7% とかなりの差を保っているのは困つたことである。これは自殺企図が一応解消したとしても、解消の仕方・方向が適切でなかつたからだと解される。また「人生に対してどうも思わない」という曖昧な答え方をするものは B 群にかなり多いのに対して、A 群では非常に少数であつて、可か不可か二者択一的傾向のあることも注目すべきであろう。

次に、人生に対する態度は、国家や社会が

本人を所遇する態度とも関係があると考えられる。「国家や社会は私を必要としているのだ」という強い自覚を与えるような政治が行われたときには、人生に対する態度はもつと明るいものとなるであろうし、自殺を企図するようなことは抑制されるに違いない。戦時中に自殺の減少することは世界的傾向である事実がこれを裏書きしている。国民あるいは民族がある共同の目的を達成させるために収収として努力し、国家や社会の期待に応えようとするときには、自殺企図の介入する余地はないし、またあつたとしても、それは別の形で解消されることが多い。その意味で、中国やアラブ諸国などの新興・民族主義国家では恐らく自殺の数は非常に少ないものと思われるが、これらの国の統計資料がないので残念である。

以上の考え方から、「国や社会が自分に対し

てどのような所遇(態度)をしていると思うか」ということについて調べてみた。その結果は第4表の通りである。ここでも注意しておいていただきたいのは、A群の殆どは既に自殺企図が解消しており、未解消のものはごく少数であるということである。それですら今尚、「国や社会は私の存在を無用だと考えている」と答えているものはA群男子18%・女子16%もあつて、B群男子8%・女子6%と可なり開いていることである。これをもしA群のものの自殺企図当時の考え方からするならば、その差は一層顕著なものとなるであろう。「現代の青年には希望がない」とか「現代の青年は生きる目的を見出していない」とかいうことは良く聞く言葉であるが、こうしたことの事実がここに示されているようである。

要 約

今回は高校生の自殺企図における環境的諸

要因について調べた結果を報告した。そこでは成育地の環境や家庭内の状況および対人関係などは高校生の自殺企図に可なり関係しているが、経済的生活程度は予想外に関連が薄弱であつた。また、人生に対する態度において現われた差は、自殺企図が単に個人およびその家庭内の状況によつて惹起されるものではなく、国家社会と個人とのつながりかた如何にも関係していることを明らかに示している。

ここで、更に残された問題、即ち現在の深刻な悩み、自殺企図の具体的状況、総括等については第3報において報告する。

参 考 文 献

体育学研究 Vol. 3, No. 3 における「自殺を中心とした学生精神衛生に関する研究(1)」の末頁、および本研究第1報 体育学研究第4巻第2号32頁に掲げたので、ここでは省略する。